多賀城市文化財調査報告書　第38集

山王遺跡・市川橋遺跡

平成７年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

山王遺跡・市川橋遺跡

序　文

多賀城市は、特別史跡多賀城跡を有し、市域面積の約25％が埋蔵文化財包蔵地となっております。市政施行以来「史跡のまち」をスローガンに、本市では昭和62年に埋蔵文化財調査センターを設置し、以来遺跡の発掘調査や資料の収集・保存・展示さらには埋蔵文化財に対する普及・啓蒙活動を積極的に行ってきました。

今回の調査は、東北電力株式会社の鉄塔移設に伴う発掘調査であります。山王・市川橋両遺跡は、古代においては多賀城を取り巻く一連の遺跡であり、山王遺跡については古墳時代前期にまで遡る県内でも有数の遺跡であると思われます。このようなことから両遺跡は、古代およびそれ以前の多賀城を知る上では、学術的に見て大変貴重な遺跡であるといえます。

本報告書が研究者のみならず、一般市民の方々にも広く活用され、埋蔵文化財に対して御理解頂ければ幸いです。

最後になりましたが、報告書作成にあたっては、県文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、東北電力株式会社のご協力を得、また山王遺跡発見の遺物については、東北学院大学の辻秀人氏より御教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

多賀城市教育委員会

教育長　櫻　井　茂　男

例　言

1．　本書は、東北電力株式会社の鉄塔移設に伴う発掘調査（山王遺跡第25次、市川橋遺跡第15次）の報告書である。

2．　本書中における各遺構の略号は次の通りである。

　ＳＢ－堀立柱建物跡、ＳＥ－井戸跡、ＳＤ－溝跡、ＳＫ－土広、ＳＲ－河川跡

3．　本書挿図中の水糸レベルは標高値を差す。

4．　調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

5．　本報告書の土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原　1976）を使用した。

6．　本書の執筆・編集は、当センターの協力を得て、山王遺跡第25次を鈴木孝行、市川橋遺跡第15次を武田健市が担当した。

7．　発掘調査および報告書作成にあたり、県文化財保護課、多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館の諸氏の御教示、御協力を得た。

8．　山王遺跡第25次で出土した遺物については、辻秀人氏（東北学院大学助教授）の御教示を得た。

9．　本書の作成にあたっては、大山真由美、福原弥子、進藤漢子、関根香織、太田久美子、赤坂菜緒子、須藤美智子、伊藤美恵子、下山美香の協力を得た。

10．　調査、整理に関する諸記録および出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保管している。

調　査　要　項

〈山王遺跡第25次調査〉

1．　遺跡所在地　宮城県多賀城市市川字多賀前21-３、22-６

2．　調査面積　150㎡

3．　調査期間　平成６年４月１日～平成６年５月13日

4．　調査主体　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

5．　調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　鳥山　文夫

調査員　相沢清利、鈴木孝行、菊池　豊、武田健市

〈市川橋遺跡第15次調査〉

1．　遺跡所在地　宮城県多賀城市市川字鴻の池３-２、16-１

2．　調査面積　372㎡（対象面積620㎡）

3．　調査期間　平成６年４月１日～平成６年４月19日

4．　調査主体　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

5．　調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　鳥山　文夫

調査員　相沢清利、武田健市

調査参加者

赤間栄次郎、赤間かつ子、浅野真、阿部トシ子、阿部弘、遠藤実、岡部昭三、菅野恵子、後藤しのぶ、今野和子、今野孝男、笹井希美枝、佐々木欣也、菅原吉明、鈴木一彦、鈴木太仲、鈴木寿二、橋本務、平山節子、藤田恵子、星忠次郎、真野勝男、水越朝治、宮川ハルミ、山田吉之助、渡辺正一、渡辺ゆき子

本 文 目 次

序　文
例　言
調査要項

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　山王遺跡第25次調査 …… 2
　1．山王遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
　2．調査の方法と経過 …… 2
　3．調査成果 …… 5
　　(1)　基本層位と出土遺物 …… 5
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 7
　　(3)　井戸跡 …… 8
　　(4)　溝　跡 …… 11
　　(5)　土　坑 …… 13
　4．まとめ …… 17
Ⅲ　多賀城市、山王遺跡25次調査におけるプラント・オパール分析 …… 18

　写真図版 …… 21

Ⅳ　市川橋遺跡第15次調査
　1．遺跡の立地と環境 …… 25
　2．調査の方法と経緯 …… 25
　3．基本層位 …… 26
　4．発見遺構と遺物 …… 26
　5．まとめ …… 28

　写真図版 …… 29

Ⅰ　調査に至る経緯

本調査については、東北電力株式会社から鉄塔建設工事の計画が提示されたため、その内容等について協議した。当該地は、山王遺跡、市川橋遺跡の包蔵地内に位置し、付近の調査で道路跡、掘立柱建物跡、河川跡などが発見されており、古代の遺構が存在する可能性が十分考えられた。そのため申請者と調査日程等の協議を行い、 鉄塔建設予定地の発掘調査について同意が得られたので本調査を実施した。

第１図　調査区位置図

Ⅱ　山王遺跡第25次調査

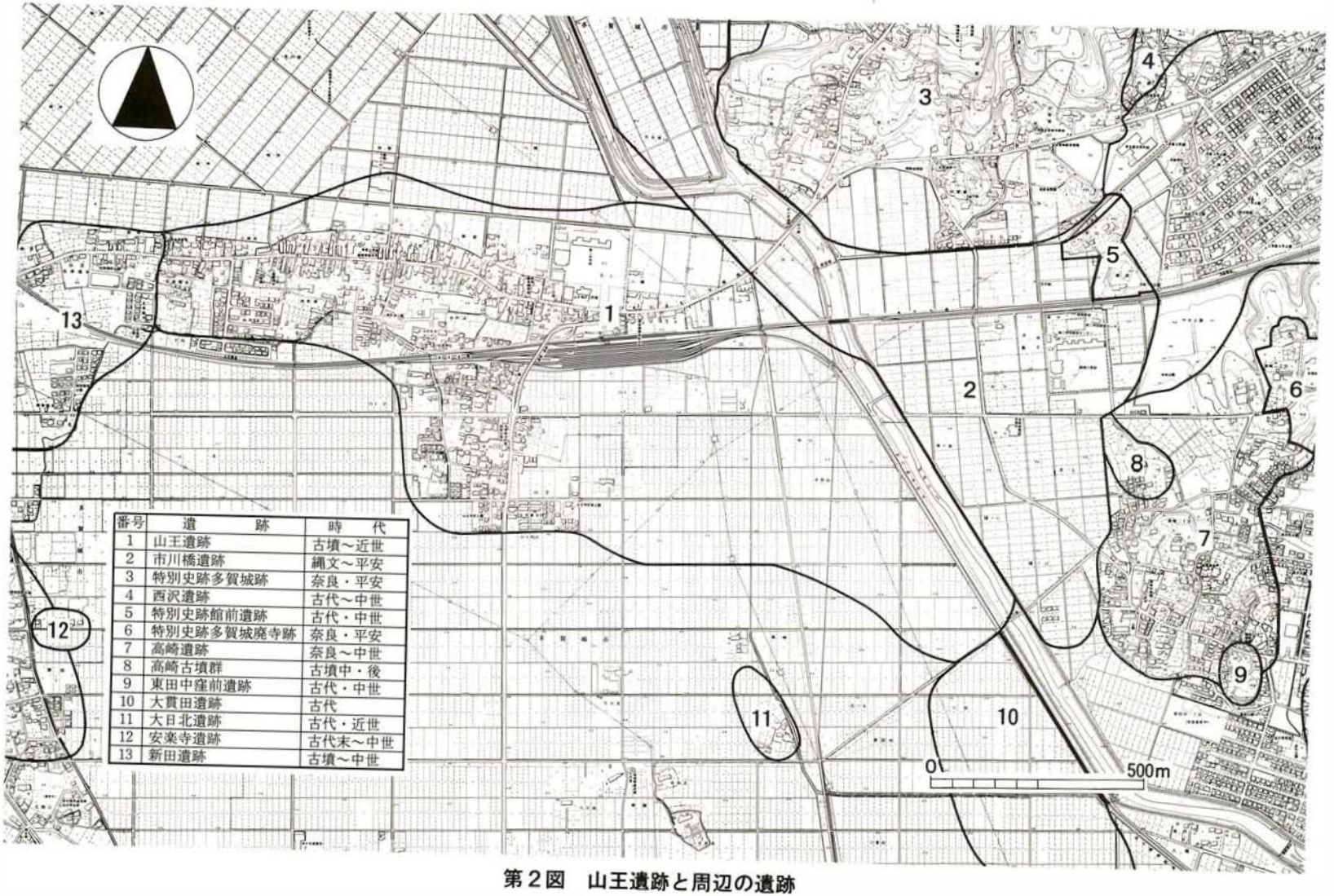
1．山王遺跡の立地と歴史的環境

山王遺跡は、多賀城市山王、南宮の両地区を中心とする東西約２km、南北約１kmの広範囲にわたる遺跡である。本調査地点は旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に立地しており、海抜４ｍを計る。周辺の遺跡についてみると、本調査区から北東約1.1kmの丘陵上に古代陸奥国府である特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面一帯には市川橋遺跡が所在しており、山王遺跡、新田遺跡、高崎遺跡とともに古代多賀城をとりまく大規模な集落群を構成している。

本遺跡内における過去の調査では、古墳時代から近世にわたる遺構、遺物を多数発見しており、特に古墳時代と奈良、平安時代のものに注目すべき成果が得られている。古墳時代のものとしては、東町浦、西町浦地区より方形に区画する溝跡、土坑、竪穴住居跡等を発見し、八幡地区においては竪穴住居跡のほかに鍛冶工房跡を発見している。遺物は、土器類の他に臼玉、ガラス玉、コハク玉の玉類や、石製模造品などが出土している。また奈良、平安時代のものとしては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡、塀跡などを発見している。遺物は、土師器、須恵器の他に、瓦、施釉陶器、墨書土器、円面硯、石帯、漆紙文書等が出土している。これらの遺構、遺物などから古代多賀城と関連が強い遺跡として認識されている。

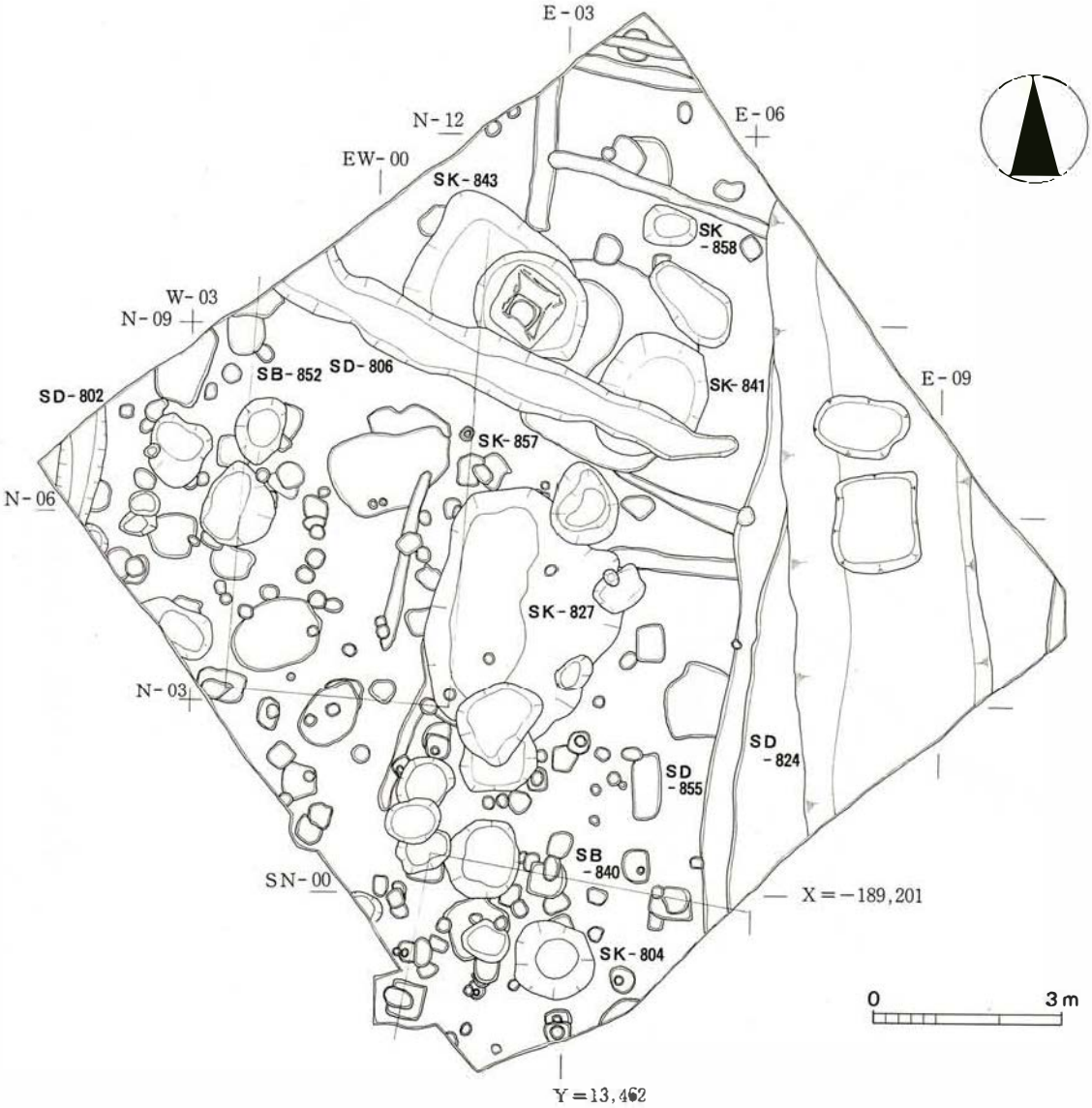
2．調査の方法と経過

本調査は、鉄塔が建設される144㎡を対象に重機で表土をはぎ、実際に遺構が損壊を受ける36㎡について事前調査を行い、残りの部分については確認調査を実施した。調査は４月１日に重機によって遺物包含層の上面まで掘り下げ、遺構の有無を確認した。４月６日より遺物包含層を掘込み、除去した後、第Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。第Ⅲ層上面では、古代の遺構を発見し、随時平面図（1/100,1/20）を作成して掘込みを開始した。これらの作業は４月いっぱいで概ね終了し、５月からは第Ⅲ層より下層での遺構、遺物の有無の確認を行った。その結果、第Ⅶ層上面で古墳時代前期の遺物を発見した。しかし、この層の上面で遺構は確認できなかった。また、この層の性格を把握するために土壌のサンプリングを行い分析を依頼した。５月13日には調査区の埋め戻しを行い、すべての作業が終了した。



番号	遺　　跡	時　代
1	山王遺跡	古墳～近世
2	市川橋遺跡	縄文～平安
3	特別史跡多賀城跡	奈良・平安
4	西沢遺跡	古代～中世
5	特別史跡館前遺跡	古代・中世
6	特別史跡多賀城廃寺跡	奈良・平安
7	高崎遺跡	奈良～中世
8	高崎古墳群	古墳中・後
9	東田中窪前遺跡	古代・中世
10	大貫田遺跡	古代
11	大日北遺跡	古代・近世
12	安楽寺遺跡	古代末～中世
13	新田遺跡	古墳～中世

第２図　山王遺跡と周辺の遺跡


E-03
N-12
E-06
EW-00
SK-843
SK-858
W-03
N-09
SB-852
SD-806
SD-802
SK-841
E-09
SK-857
N-06
SK-827
N-03
SD-824
SD-855
SB-840
SN-00
X=−189,201
SK-804
0
3m
Y=13,462

第３図　調査区全体図

3．調　査　成　果

(1) 基本層位と出土遺物

基本層位はⅠからⅨ層に分けることができ、すべての層が調査区全域にわたって堆積していた。

第Ⅰ層　表土。層厚10～20cm。

第Ⅱ層　炭化物と遺物を多量に含む層。明らかに時期の異なる遺物が混在していることから二次的な堆積層の可能性が高い。層厚10～30cm。

第Ⅲ層　均質でしまりのある砂質土層で、上面は遺構検出面となっている。層厚10～20cm。

第Ⅳ層　均質でしまりのあるシルト層。層厚10～20cm。

第Ⅴ層　炭化物を斑状に含む粘土質土層。層厚５cm。

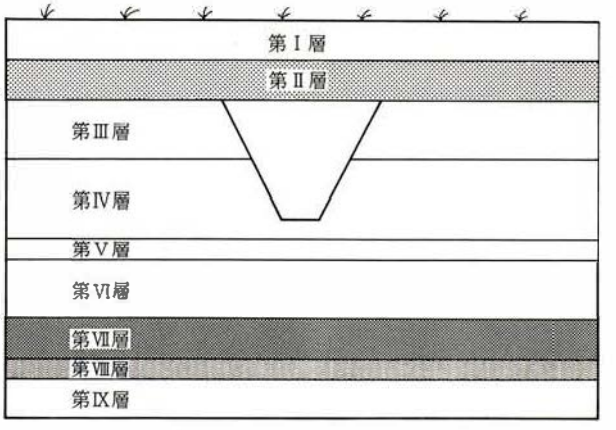
第Ⅵ層　均質でしまりのあるシルト層。Ⅳ層に近似。層厚５～20cm。

第Ⅶ層　下面にやや乱れのみられる粘土質土層。土師器の壺と甕をこの層の上面で、高杯を層中で発見している。この層についてはプラント・オパール分析を行っており、その結果（別稿参照）、イネのプラント・オパールが高い密度で検出されている。

第Ⅷ層　黒褐色を基調とした層で、若干黄色ブロックを含んでいる。層厚５～10cm。

第Ⅸ層　黄色を基調とした砂層。層厚10～15cm。

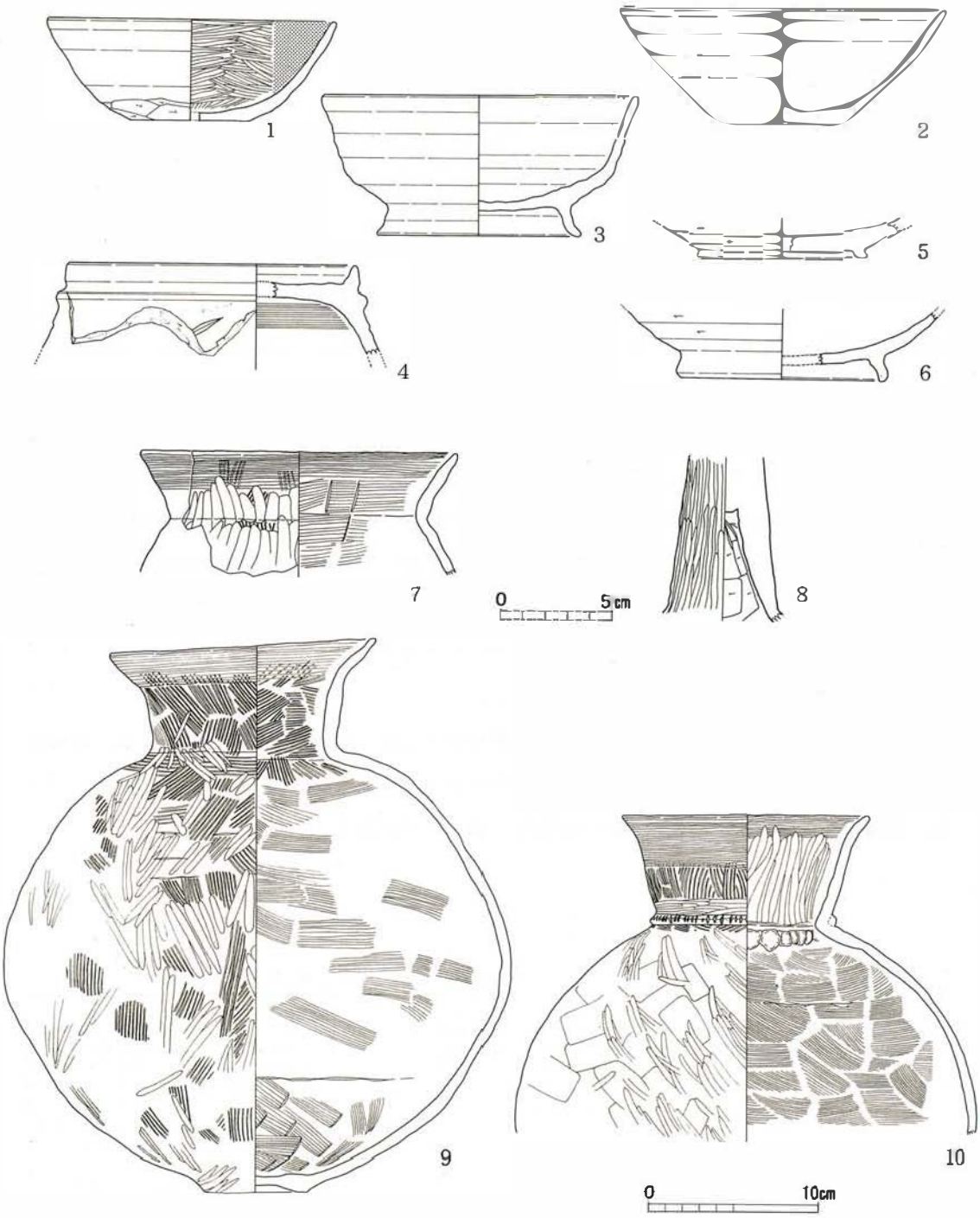
遺物は第Ⅱ層と第Ⅶ層から出土しており、第Ⅱ層からは、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・平瓶・長頸瓶、灰釉陶器、赤焼き土器、平瓦、円面硯、砥石などが出土している。第Ⅷ層からは、古墳時代前期の土師器壺、甕、高杯が出土している。



第４図　基本層位模式図

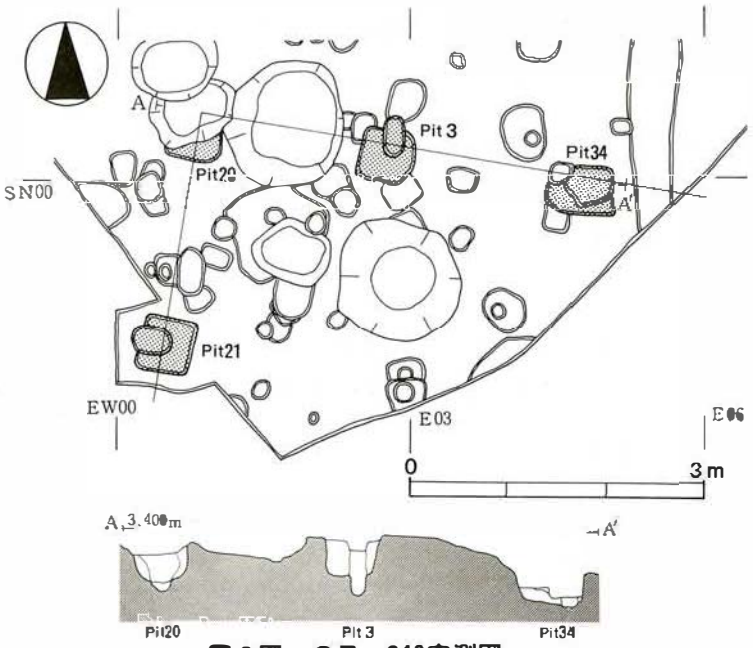
基本層

層位	土　色	土　質
Ⅰ	褐灰色(10YR4/1)	粘土
Ⅱ	黒褐色(10YR3/1)	シルト
Ⅲ	浅黄色(2.5Y7/4)	砂質シルト
Ⅳ	にぶい黄色(10YR6/3)	シルト
Ⅴ	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト
Ⅵ	にぶい黄色(10YR6/3)	シルト
Ⅶ	褐灰色(10YR4/1)	粘土シルト
Ⅷ	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト
Ⅸ	浅黄色(2.5Y7/4)	シルト

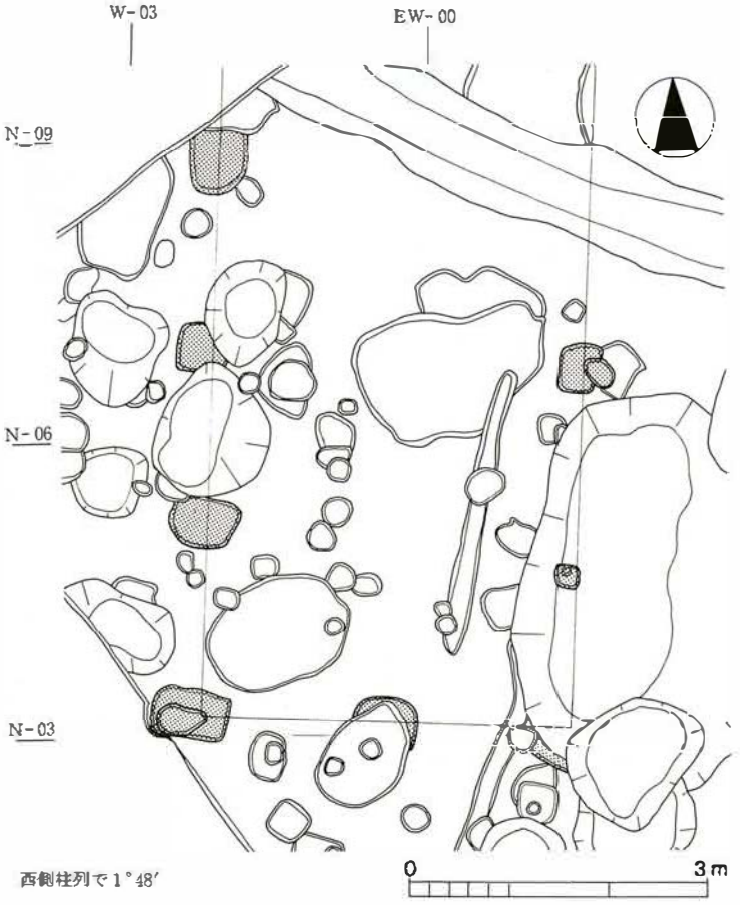


番号	層位	器類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	L－Ⅱ	土師器杯	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	ヘラミガキ後黒色処理	(13.0)	(5.4)	4.5	
2	L－Ⅱ	赤焼き土器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.6)	5.8	5.1	
3	L－Ⅱ	須恵器高台付杯	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.2)	(9.1)	6.2	
4	L－Ⅱ	円面硯	ロクロナデ	ロクロナデ				
5	L－Ⅱ	灰釉陶器皿	回転ヘラケズリ	ロクロナデ		7.4		
6	L－Ⅱ	灰釉陶器皿	回転ヘラケズリ	ロクロナデ		9.0		
7	L－Ⅶ	土師器甕	(口) ハケメ→ヨコナデ (体) ハケメ→ヘラミガキ	ナデ				
8	L－Ⅶ	土師器高杯	ヘラミガキ	ヘラケズリ				
9	L－Ⅶ	土師器甕	(口) ハケメ→ヨコナデ (体) ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ、ナデ				
10	L－Ⅶ	土師器甕	(口) ハケメ→ナデ (体) ケズリ→ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ				頸部に刺突のある瓶形

第5図　基本層出土遺物



第６図　ＳＢ－840実測図



第７図　ＳＢ－852実測図

(2) 掘立柱建物跡

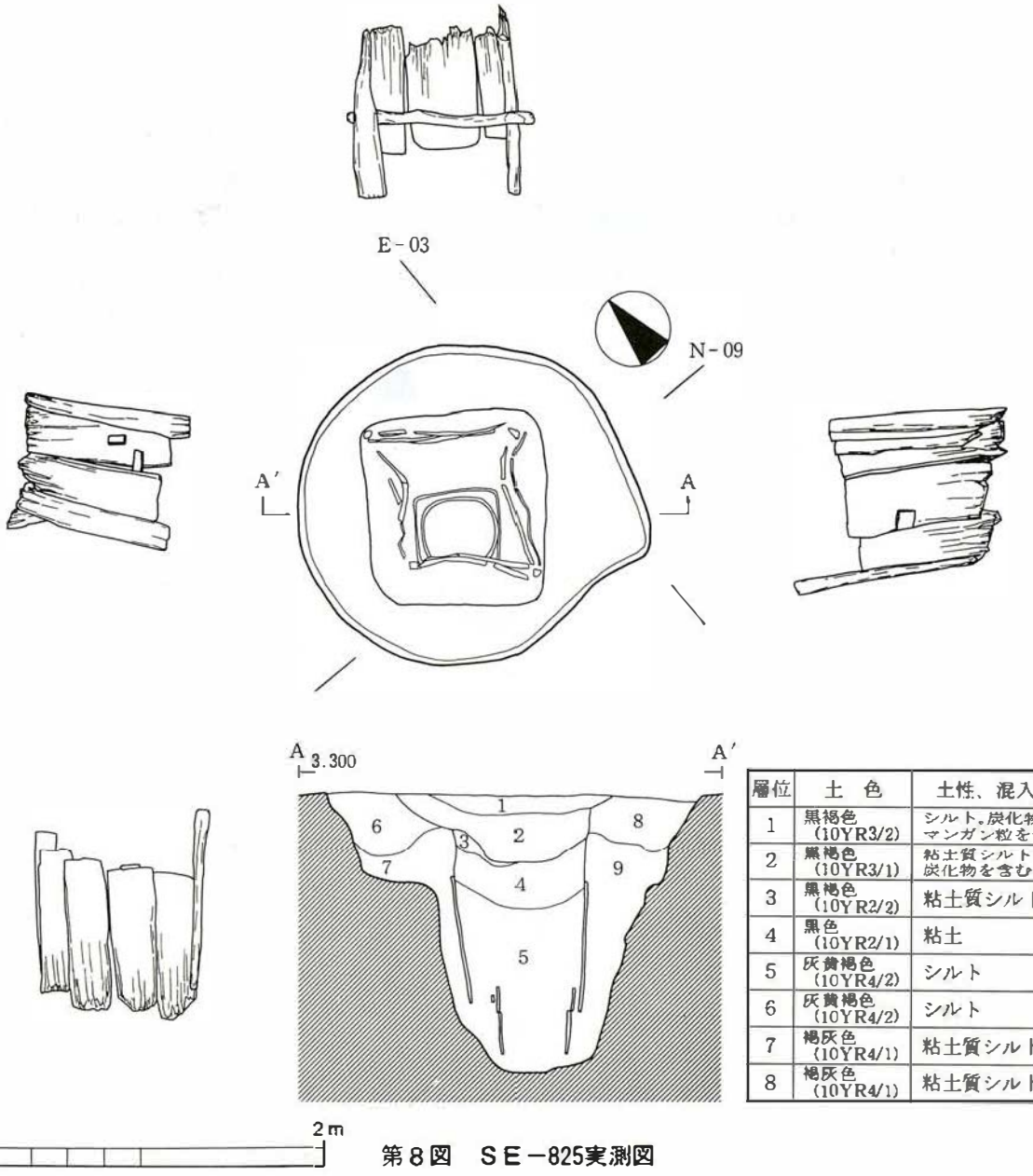
ＳＢ－840　調査区南端で発見した、南北１間以上、東西２間以上の建物跡である。ＳＫ－832と重複関係があり、これよりも古い。南北１間、東西２間を発見したにすぎないため、南北棟であるのか東西棟であるのか不明である。柱穴は、すべて抜き穴を伴っており、柱痕跡を抜き穴の底面で確認していることから、柱を切り取った可能性が考えられる。建物の方向は、西側柱列でみると、北で12度31分東に傾いている。柱間は、西側柱列で、2.30m、北側柱列で西より、2.00m、2.15mとなっている。柱穴の形態は、１辺が50～60cmの方形、長方形を呈している。埋土は、黄褐色土を含む黒褐色土である。遺物は、ロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯・甕の小片が出土している。

ＳＢ－852　調査区中央よりやや西よりで発見した南北３間以上東西２間の南北棟建物跡である。ＳＫ－809、810、811、817、819、827と

重複関係があり、これらよりも古い。柱穴は概ね方形で、西側柱列の最も北で発見した柱穴では礎板を用いている。方向は西側柱列でみると、北で1度48分東に傾いている。桁行については、西側柱列で、5.80m以上、柱間は南より、2.00m、1.85m、2.15mである。梁行柱間については、南妻で、西から1.82m、1.90mとなっている。柱穴埋土は、黄色ブロック土を含む灰黄褐色土である。遺跡は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土している。

(3) 井 戸 跡

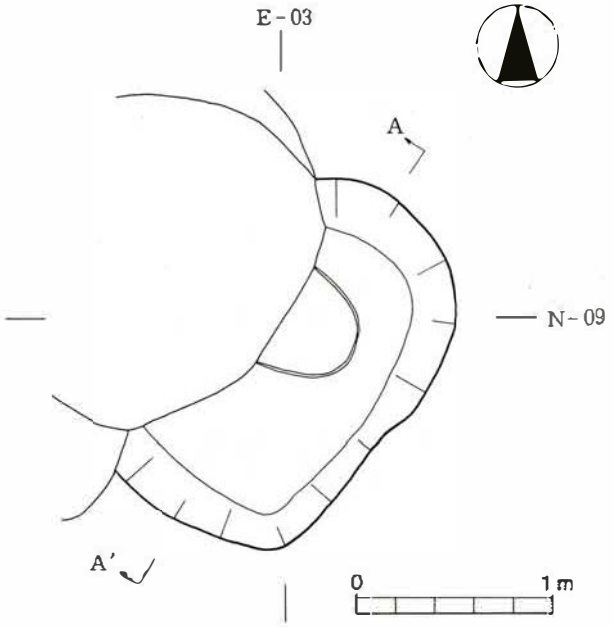
ＳＥ－825　調査区中央部やや北よりで発見した。ＳＥ－849、ＳＫ－843と重複しており、これらよりも新しい。木組みの井戸枠を有し、底には水溜め用の曲物を備えている。掘り方は不整



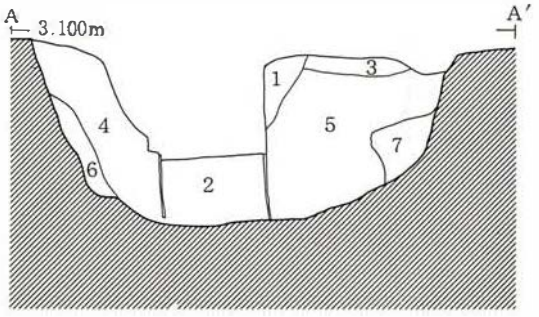
層位	土　色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト。炭化物、マンガン粒を含む
2	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト。炭化物を含む
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト
4	黒色 (10YR2/1)	粘土
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト
7	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト
8	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト

第８図　ＳＥ－825実測図

円形をしており、直径1.68mを計る。井戸側は0.80mの正方形を呈している。縦板材の長さは、0.60～1.40m、幅15cm～48cm、厚さ2cmとなっている。井戸の構造についてみると、四隅に支柱を立て、それに横桟を取り付けて縦板材を固定する仕組みになっている。水溜めは、隅丸方形の曲物の中に円形の曲物を2個据えてあった。また、円形の曲物には、孔をあけ水が入り込み易いようになっている。埋土についてみてみると、掘り方埋土は、黄色シルトブロックを含んだ灰黄褐色土で、井戸枠内埋土は、砂粒を若干含んだ黒褐色粘土となっている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶・高台付杯、斎串、刀子などが出土している。

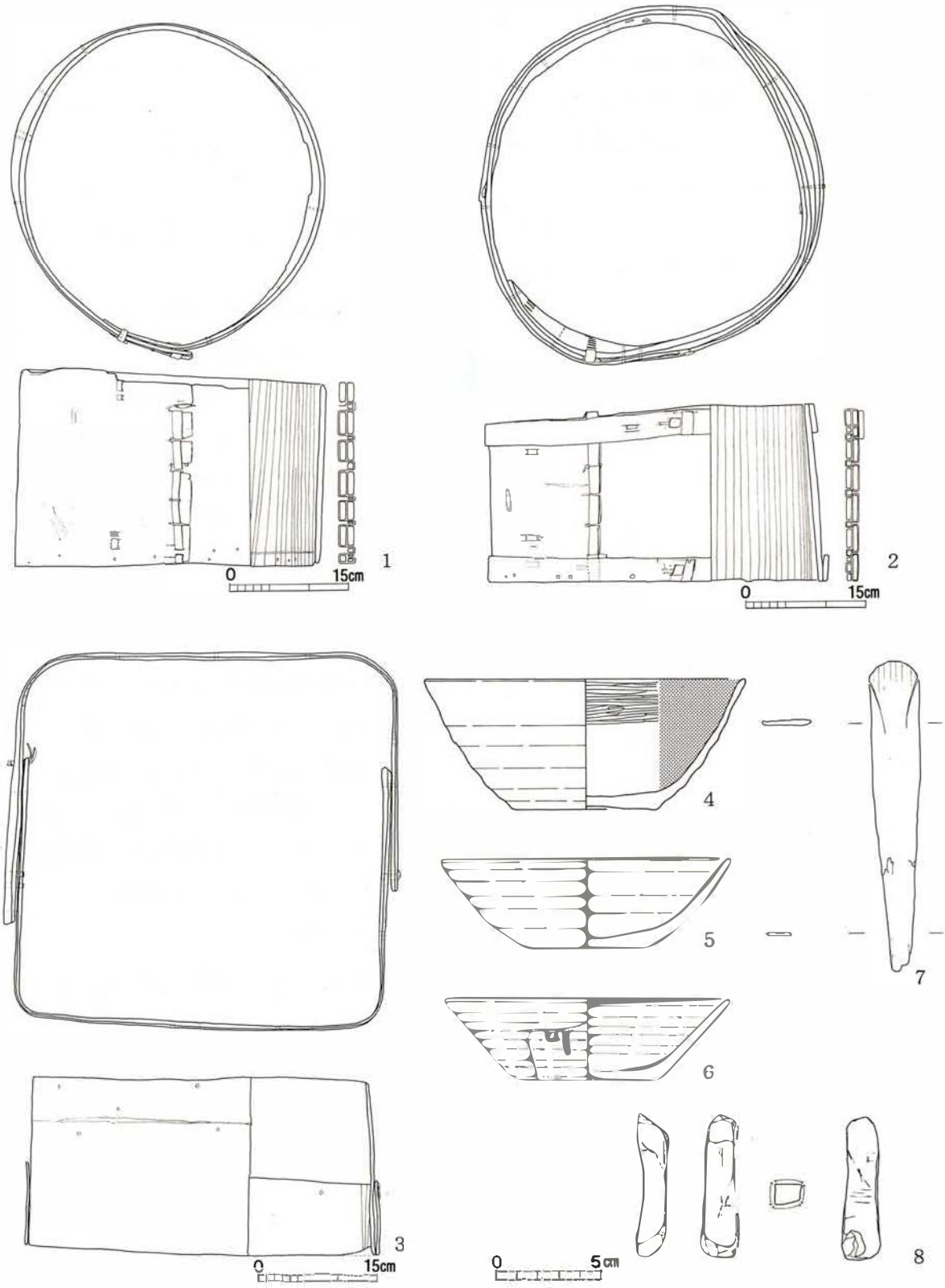


SE－849　調査区中央部やや北より、SE－825の東側で発見した。SE－825、SK－841、857と重複しており、SE－825、SK－841よりも古いがSK－857よりも新しい。底には、水溜め用の曲物を備えているが、SE－825の掘り方に壊されている。掘り方は、SE－825に半分ほど壊されているため形態などは不明であるが、直径が1.90mほどの規模をもつものと考えられる。埋土は、掘り方埋土が黄色シルトブロックを含む黒褐色土で井戸枠内埋土は、黒褐色粘土である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕などがある。土師器には、ロクロ調整のものもある。



層位	土　　色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト。砂粒を含む
2	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト
4	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト
5	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂

第9図　SE－849実測図



第10図　井戸跡・出土遺物

番号	遺構名	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SE-825		木製品曲物						
2	SE-825		木製品曲物						
3	SE-825		木製品曲物						
4	SE-825	井戸枠内Q-1	土師器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ後黒色処理	(15.2)	(6.6)	6.2	
5	SE-825	掘り方Q-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(13.8)	6.0	4.3	底部ヘラ書き「×」
6	SE-825	掘り方Q-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(13.6)	(6.8)	4.0	外体部煤痕
7	SE-825	井戸枠内Q-2	畜串						
8	SE-825	井戸枠内Q-2	砥石						

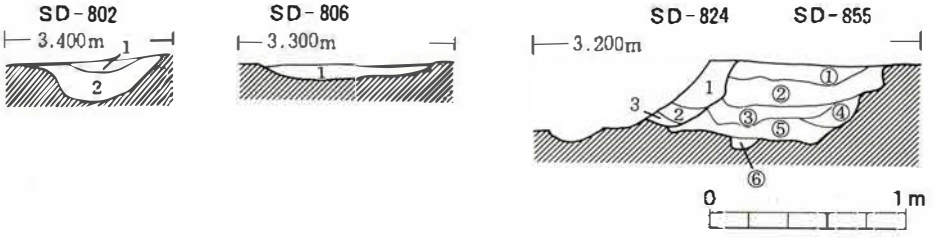
(4) 溝　跡

SD−802　調査区の西端の第Ⅱ層上面で発見した。規模は、上幅0.65m、下幅0.30m、深さ0.20mである。埋土は黒褐色粘土層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕の小片が出土している。

SD−806　調査区中央よりやや北よりの第Ⅲ層上面で発見した。SK−821、843、857、SE−825と重複しており、これらよりも古い。規模は、上幅0.90m、下幅0.60m、深さ0.10mである。埋土は黒褐色土で炭化物を少し含んでおり、基本層の第Ⅱ層と近似している。土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕・瓶、赤焼き土器などが出土している。

SD−824　調査区中央やや北よりで発見した。SD−855と重複関係があり、これよりも新しい。規模は、後世の溝に壊されているため全体は把握できなかったが、上幅0.45m以上、下幅0.20m以上、深さ0.30mとなっている。方向は、北で8度6分東に傾いている。埋土は、上層が黒色の粘土層で、下層は黄色ブロックを含んだ層になっている。遺物は、土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕、灰釉陶器片、赤焼き土器、土錘などが出土している。土師器には、ロクロ調整のものも含んでいる。

SD−855　調査区中央やや北よりで発見した。SD−824と重複関係があり、これよりも古い。規模は、上幅0.85m以上、下幅0.60m以上、深さ0.40mとなっている。方向は、北で6度31分東に傾いている。埋土は、しまりのある灰黄褐色土である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕などか出土している。



SD-802

層位	土色	土性、混入物
1	黒色 (10YR2/1)	粘土
2	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘土質シルト

SD-824

層位	土色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR2/1)	粘土質シルト、炭化物を含む
2	黄灰色 (2.5YR4/1)	粘土質シルト、炭化物を少し含む
3	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト

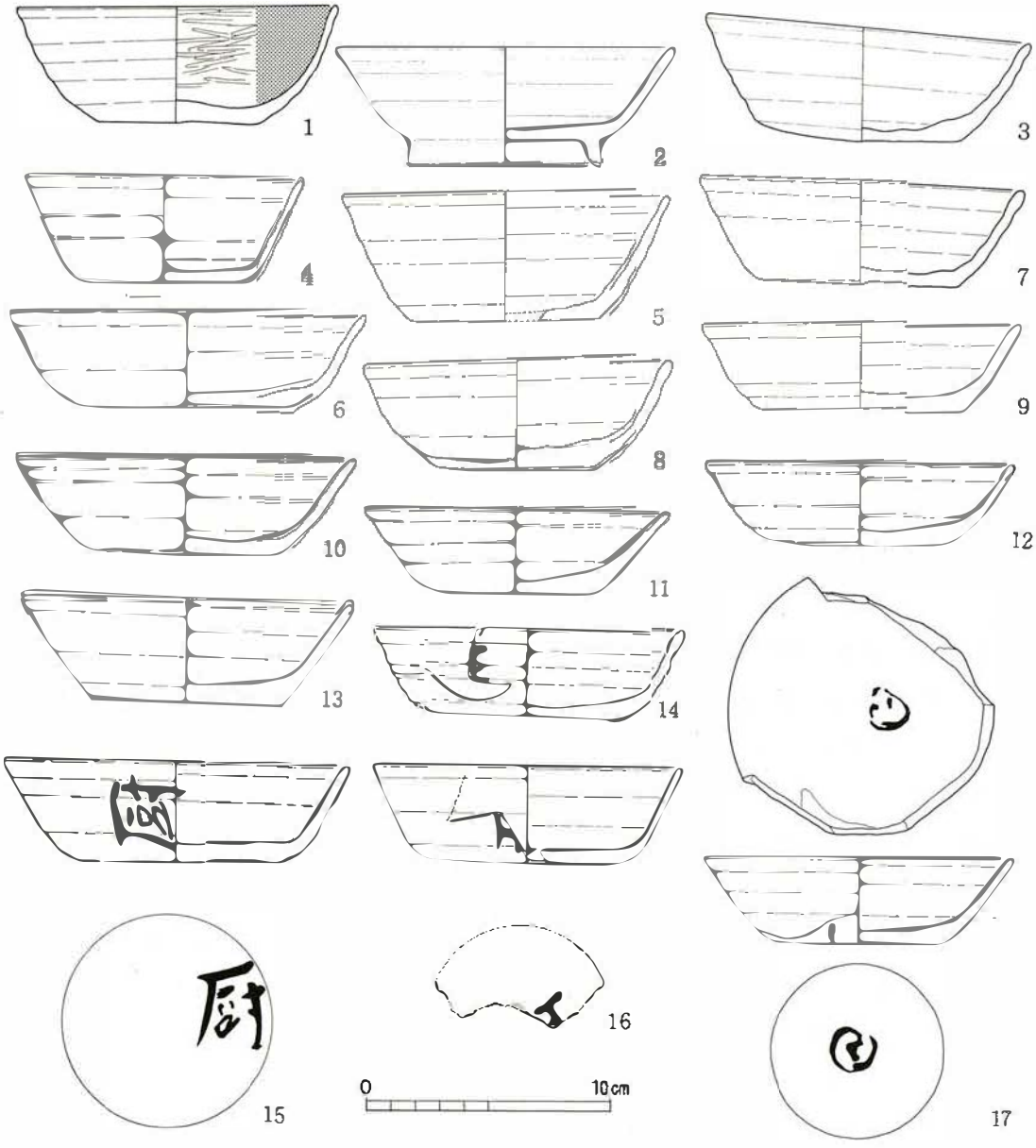
SD-806

層位	土色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト、炭化物、マンガン粒を含む

SD-855

層位	土色	土性、混入物
①	灰黄褐色 (10YR6/2)	シルト、マンガン粒、炭化物を含む
②	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト
③	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト
④	黒褐色 (10YR3/1)	粘土
⑤	黒褐色 (10YR3/2)	粘土

第11図　溝跡上層断面図



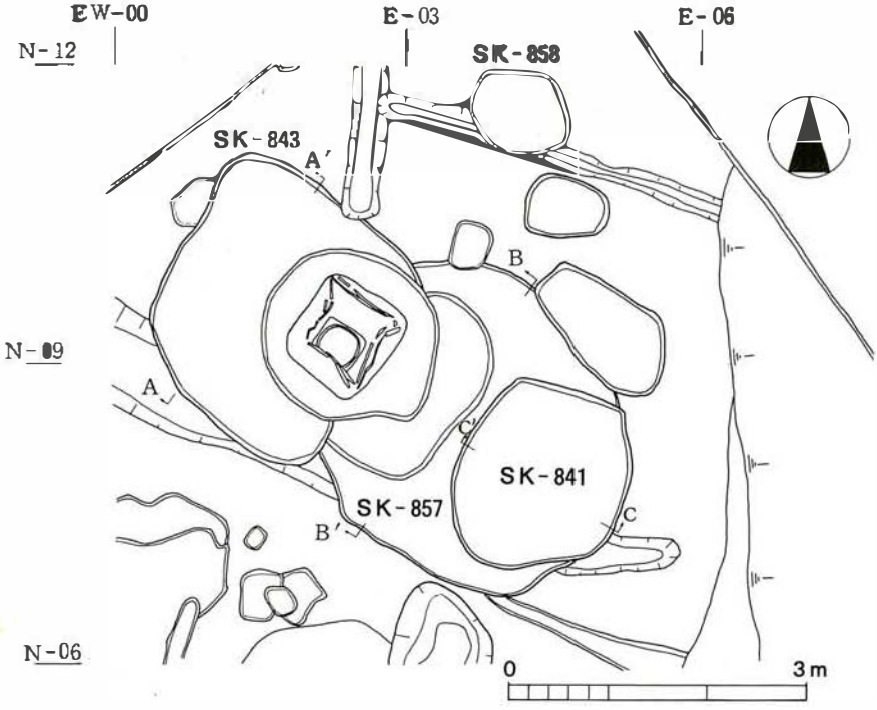
番号	遺構名	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD-824	Ⅱ-1	土師器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	ヘラミガキ後黒色処理	13.2	6.4	4.7	
2	SD-824	Ⅱ-1	須恵器高台付杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.9)	8.0	(4.8)	
3	SD-824	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.2	8.3	4.6	
4	SD-824	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(11.4)	7.0	(4.4)	
5	SD-824	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(13.4)	(7.8)	(5.3)	
6	SD-824	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(14.6)	(8.6)	(4.0)	
7	SD-855	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.3	8.1	4.2	
8	SD-855	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	12.7	6.5	4.5	
9	SD-855	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0)	(8.0)	3.5	
10	SD-855	Ⅱ-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(14.0)	(7.6)	4.0	
11	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	12.5	6.0	3.4	
12	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(12.6)	7.0	3.4	
13	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6)	7.8	4.2	
14	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	12.8	7.8	3.6	墨書
15	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	14.2	8.3	4.1	外体、底部「厨」墨書
16	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(12.6)	(7.4)	(4.0)	墨書
17	SD-855	Ⅱ-2	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(12.6)	(7.0)	3.5	墨書

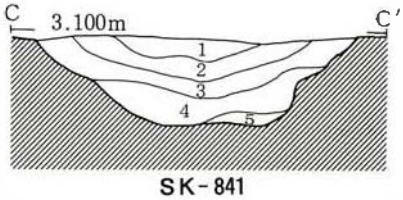
第12図　溝跡出土遺物

(5) 土　　坑

調査区全域にわたって分布しており、29基発見した。性格不明のものが大部分を占めており、ＳＥ－825周辺の大規模な土坑を除いては、規模、形態、出土遺物について概要を表にして示す。

検出面は、すべて第Ⅲ層上面である。





SK-841

SK-841

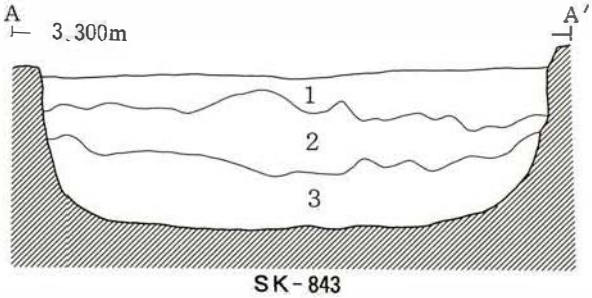
層位	土　色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト,炭化物,焼土を含む
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト
4	黒色 (10YR2/1)	黒色粘土
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト

SK-843

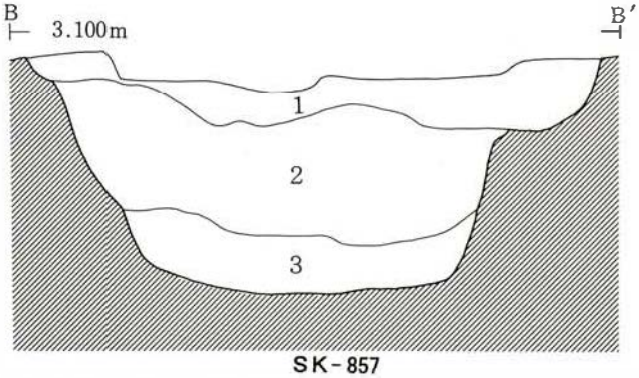
層位	土　色	土性、混入物
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト,炭化物を含む
2	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト

SK-857

層位	土　色	土性、混入物
1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂
3	黒褐色 (10YR3/1)	粘土



SK-843



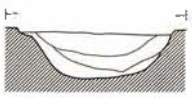
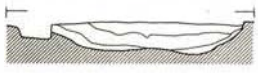
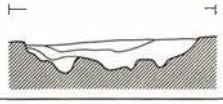
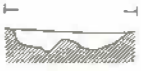
SK-857

第13図　ＳＫ－841、843、857実測図

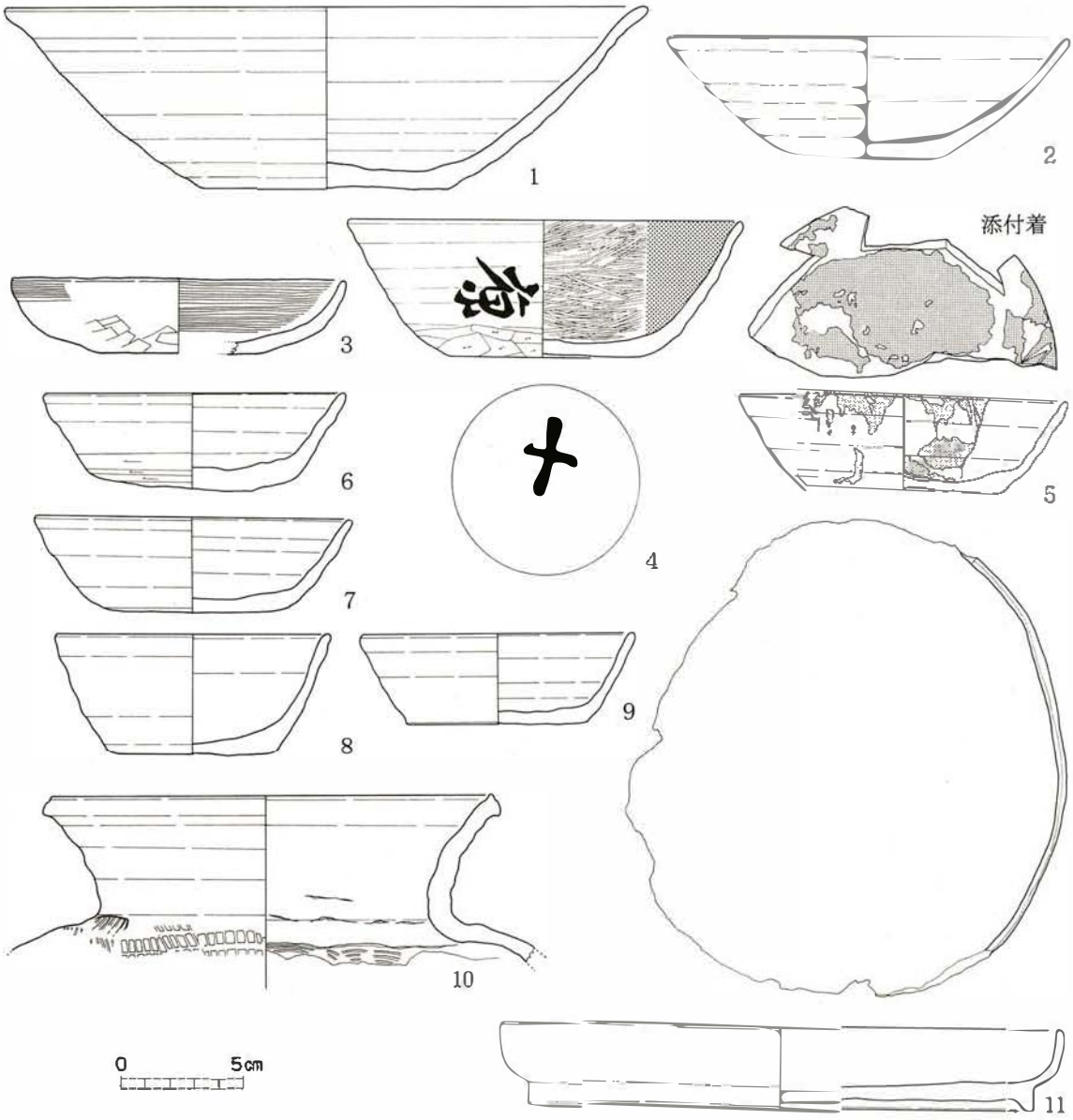
ＳＫ－841　調査区中央やや北よりで発見した。ＳＤ－806、ＳＫ－857と重複関係があり、ＳＤ－806より古く、ＳＫ－857よりも新しい。平面形は不整楕円を呈する。規模は、長軸2.02m、短軸1.70m、深さ0.44mを計る。埋土は、黒褐色粘土層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土している。

ＳＫ－843　調査区中央やや北より、ＳＥ－825の北側に位置する。ＳＤ－806、ＳＥ－825、849、ＳＫ－857と重複関係があり、ＳＤ－806、ＳＥ－825よりも古いが、ＳＥ－849、ＳＫ－857よりも新しい、埋土は、黄褐色土ブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土している。

ＳＫ－857　調査区中央部よりもやや北よりに位置する。ＳＤ－806、ＳＫ－841、ＳＥ－849と重複関係があり、これらよりも古い。平面形は、不整楕円形であると思われる。規模は、長軸3.30m、短軸2.98m、深さ1.20mを計る。埋土は３層に分けられ、１層は黄褐色ブロックを含む灰黄褐色土で、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。２層は自然堆積の砂層、３層は黒褐色粘土層となっている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土している。土師器には、ロクロ調整のものを少量含んでいる。

遺構名 平面規模 深さ	断面図（S：1/60）	出土遺物
ＳＫ－８０４ 長径　1.25m 短径　1.20m 深さ　0.34m		土師器杯・甕、高台付杯、須恵器杯
ＳＫ－８０５ 長径　1.30m 短径　1.04m 深さ　0.43m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
ＳＫ－８０８ 長径　0.90m 短径　0.68m 深さ　0.15m		土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯
ＳＫ－８０９ 長径　1.16m 短径　0.82m 深さ　0.07m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯
ＳＫ－８１０ 長径　1.44m 短径　1.32m 深さ　0.24m		土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯
ＳＫ－８１１ 長径　1.42m 短径　1.10m 深さ　0.22m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
ＳＫ－８１２ 長径　－ m 短径　－ m 深さ　0.16m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯

SK－813 長径　0.90m以上 短径　0.78m 深さ　0.14m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－816 長径　1.52m 短径　0.90m 深さ　0.27m		土師器杯、須恵器杯・甕
SK－817 長径　－ m 短径　－ m 深さ　－ m		土師器杯・甕、須恵器杯
SK－819 長径　1.08m 短径　0.74m 深さ　0.30m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯
SK－821 長径　0.78m 短径　0.62m 深さ　0.08m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯
SK－822 長径　0.86m 短径　0.58m 深さ　0.16m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－823 長径　1.62m 短径　0.84m 深さ　0.12m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－827 長径　3.60m 短径　2.92m 深さ　0.21m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋、瓦、赤焼き土器杯
SK－829 長径　1.24m 短径　0.80m 深さ　0.18m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－830 長径　0.65m 短径　0.46m 深さ　0.14m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－831 長径　－ m 短径　－ m 深さ　0.19m		土師器甕、須恵器杯・甕
SK－832 長径　0.86m 短径　0.64m 深さ　0.15m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕
SK－845 長径　1.58m 短径　－ m 深さ　0.17m		なし
SK－858 長径　1.05m 短径　0.90m 深さ　0.74m		土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋



番号	遺構名	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SK-809	Q-1	赤焼き土器	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(26.2)	(10.0)	7.3	
2	SK-809	Q-1	赤焼き土器	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(16.4)	5.8	4.9	
3	SK-823	Q-1	土師器杯	ヨコナデ、体下部ケズリ、底部手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	(13.6)	(6.5)	3.0	
4	SK-841	Q-1	土師器杯	ロクロナデ、底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ	ミガキ後黒色処理	15.8	9.8	5.5	外体部「原」、底部「×」墨書
5	SK-857	Q-1	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(13.4)	(7.8)	3.9	添付者
6	SK-857	Q-3	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	12.3	(8.3)	3.9	
7	SK-857	Q-3	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	12.5	7.3	3.8	
8	SK-857	Q-3	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(11.2)	(5.5)	4.9	底部ヘラ書「×」
9	SK-857	Q-3	須恵器杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	(11.2)	(7.5)	3.6	
10	SK-857	Q-3	須恵器杯	口縁部ロクロナデ、体部格子叩き	当て具痕(同心円文)	18.0			
11	SK-858	Q-2	木製品 盤			(23.0)	(20.5)	3.3	

第14図　土坑出土遺物

4．ま と め

〈古墳時代〉

本調査区の基本層第Ⅶ層では畦畔等の遺構は発見できなかったが、プラント・オパールの分析結果および、層の下面の乱れなどから、水田土壌の可能性が考えられる。調査区周辺では、北西に位置する八幡地区、南東に位置する多賀前地区で大規模な水田跡が発見されており、本調査区の場合は距離的に近い多賀前地区との連続性が考えられる。

第Ⅶ層に伴う土師器には、高杯、壺、甕などがある。これらの器形や調整技法などから古墳時代前期の塩釜式に位置付けられ、特に高杯の脚部の特徴は塩釜式の中でも新しい段階のものに見られる形である。したがって、他の器類も出土状況から同時期かそれよりも若干時期が下るものと考えたい。

〈奈良・平安時代〉

本調査区内において、確実に奈良時代と言える遺構は発見できなかった。遺構の切り合い関係からＳＤ-855とＳＫ-857が最も古く、遺物も比較的まとまって出土している。これらの遺構から出土している土師器は、量的に少なく破片のみの資料ではあるが、ロクロを使用しないものが主体を占め、僅かにロクロを使用したものを含んでいる。須恵器杯は、切離し技法が回転ヘラ切り無調整のものと回転ヘラ切り後ナデのものがほとんどで回転糸切り無調整ものは含まない。このような特徴がある土器群は、市川橋遺跡ＳＫ－236出土の土器群と類似している。この土器群は、長岡京期（784～794）以降とみられる「壺Ｇ」が共伴しており上限年代は８世紀末と考えられている。また、漆紙文書との共伴関係から、９世紀第２四半期と考えられている多賀城跡ＳＥ－2101Ｂ井戸跡出土土器群と本調査区出土土器群と比較してみると、前者は底部の調整が回転ヘラ切りを主体とするが、回転糸切りのものも少数含まれている。後者は、底部の調整が回転ヘラ切りのみで占められている。このような点を重視すれば、本土器群が多賀城跡ＳＥ－2101Ｂ井戸跡出土土器群より古い様相であると言える。このようなことから、本土器群の年代は８世紀末から９世紀の第１四半期の間におさまるものと考えたい。

その他の遺構については、重複関係及び出土遺物の特徴などから、平安時代でも前半頃に位置付けられるものと考えられる。

近年、多賀城跡周辺は、道路による方格地割がなされており、区画された地割り内にはそれぞれ階層の異なる人々が居住していたことが明らかになっている。特に、東西大路に面する区画では国司（守）クラスの館が２ヶ所で発見されており、東西大路に南面する本調査区は、重要な区画に位置するものと考えられる。また、本調査区では、東西大路とほぼ直交する角度をとるＳＤ－855から「厨」と墨書された土器を発見している。「厨」と墨書された土器は多賀城周辺では、館前遺跡、山王遺跡第９次調査、多賀城跡第37次調査の３地点で発見されており、前２地点は国司（守）の館と推定されているところである。したがって、本調査区は、東西大路の南面に位置することや、「厨」と墨書された土器が出土していることなどから、官人層に関連する区画内に位置するものと推察しておきたい。

【引用・参考文献】

相沢清利、石川俊英（1992）「山王遺跡－第９次発掘調査報告書－」『多賀城市文化財調査報告書』第22集
相沢清利、鈴木孝行（1994）「宮城県多賀城市山王遺跡（八幡地区）」第５回東日本の水田を考える会－資料集－
石川俊英（1989）「市川橋遺跡－平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第21集
氏家和典（1957）「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』14輯
白鳥良一（1980）「多賀城跡出土土器変遷」『研究紀要Ⅶ』多賀城跡調査研究所
次山　淳（1992）「塩釜式土器の変遷とその位置付け」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
辻　秀人（1995）「東北南部における古墳出現期の土器編年　その２」
丹羽　茂（1985）「今熊野遺跡」「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」宮城県文化財報告書第104集
宮城県教育委員会（1993）「山王遺跡－多賀前地区第１次調査　仙塩道路建設関係遺跡平成４年度調査概報」
宮城県多賀城跡調査研究所（1982）「多賀城跡　政庁跡　本文編」
柳沢和明（1992）「第62次調査」「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報1992

Ⅲ 多賀城市、山王遺跡25次調査におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、埋蔵水田跡の探査を目的として山王遺跡25次調査で採取された試料についてプラント・オパール分析を行った。

2．試　　料

調査地点は、調査区南側と東側の２地点である。試料は、南側ではⅥ層、Ⅶ層、Ⅷ層、Ⅸ層の４点、東側ではⅥ層、Ⅶ層、Ⅷ層の３点の計７点である。

3．分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定。

(2) 試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μｍ，約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

(4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

(5) 沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

(6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米，ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24、0.48である。

4．分析結果

本地点で検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族の4分類群である。このうち、ウシクサ族については極僅かな検出量である。

試料1ｇ中のプラント・オパール個数を表1に示す。なお、イネに関してはダイアグラムにして図1に示した。また、各植物の推定生産量と変遷について図2に示した。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示した。

5．考　　察

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1ｇあたりおよそ3,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

イネは南側地点ではⅥ層、Ⅶ層、Ⅷ層より、西側地点ではⅦ層とⅧ層より検出された。このうち、両地点のⅦ層ではプラント・オパール密度が3,000個/ｇ以上と高い値である。したがって、同層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅵ層とⅧ層については密度がやや低い値であることから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も否定できない。

(2) 植生および環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ウシクサ族（ススキ属など）やタケ亜科は比較的乾いた土壌条件のところに生育している。このことから、これらの植物の出現傾向を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥、湿潤）を推定することができる。

今回分析を行った層準では、西側のⅧ層を除けばおおむねタケ亜科の卓越する傾向が認められる。したがって、本調査区一帯はⅨ層堆積時からⅥ層の堆積に至るまでの比較的乾いた環境で推移したものと推定される。

6．ま と め

山王遺跡25次調査において採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、Ⅶ層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、ここで稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山 -古環境編-．川口市遺跡調査会報告，10：281-298．

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-．考古学と自然科学，9：15-29．

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-．考古学と自然科学，17：73-85．

表１　プラント・オパール分析結果

多賀城市、山王遺跡２５次

南側地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Ⅵ	90	16	0.87	700	1.05	2,900	25,500	1,400	0
Ⅶ	106	8	0.92	6,400	4.90	2,100	17,900	0	0
Ⅷ	114	3	1.04	1,400	0.47	2,200	12,500	0	0
Ⅸ	117	18	0.94	0	0.00	1,400	13,800	0	0

西側地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Ⅵ	90	16	0.90	0	0.00	2,100	22,800	0	0
Ⅶ	106	8	0.98	3,600	2.98	2,200	22,100	0	0
Ⅷ	114	3	1.03	700	0.23	7,300	11,700	0	0

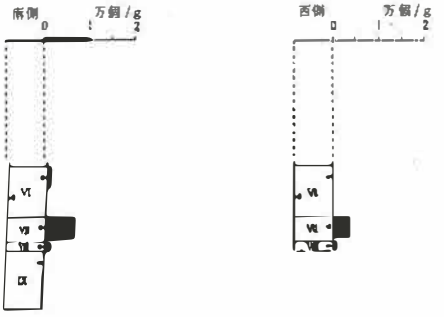


図１　イネのプラント・オパールの検出状況

(注) ◀印は50cmのスケール，●印は分析試料の採取箇所

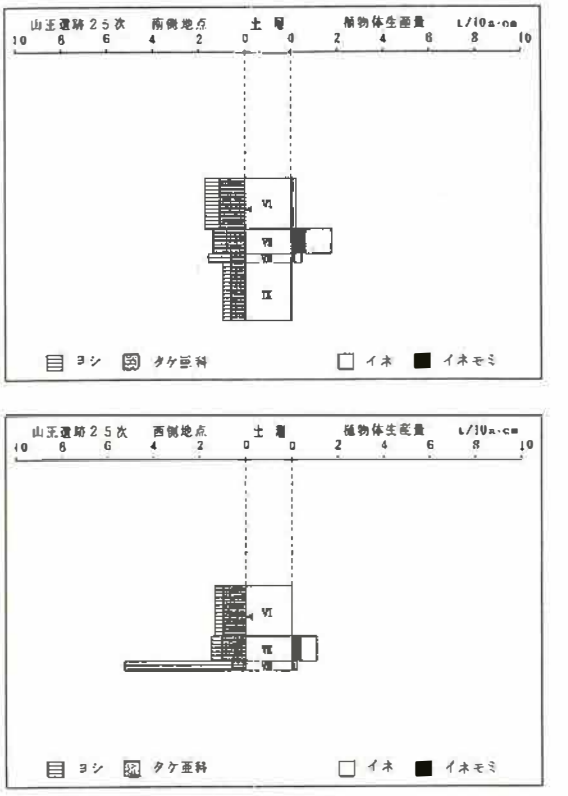


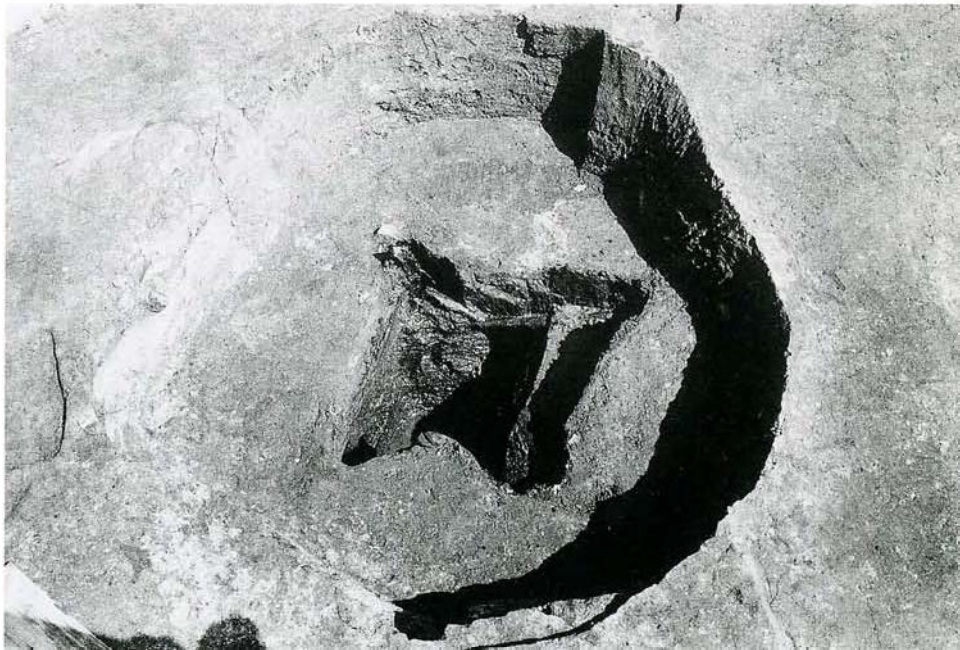
図２　おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◀印は50cmのスケール

調査区　全景

SB－840 建物跡

SE－825 井戸跡

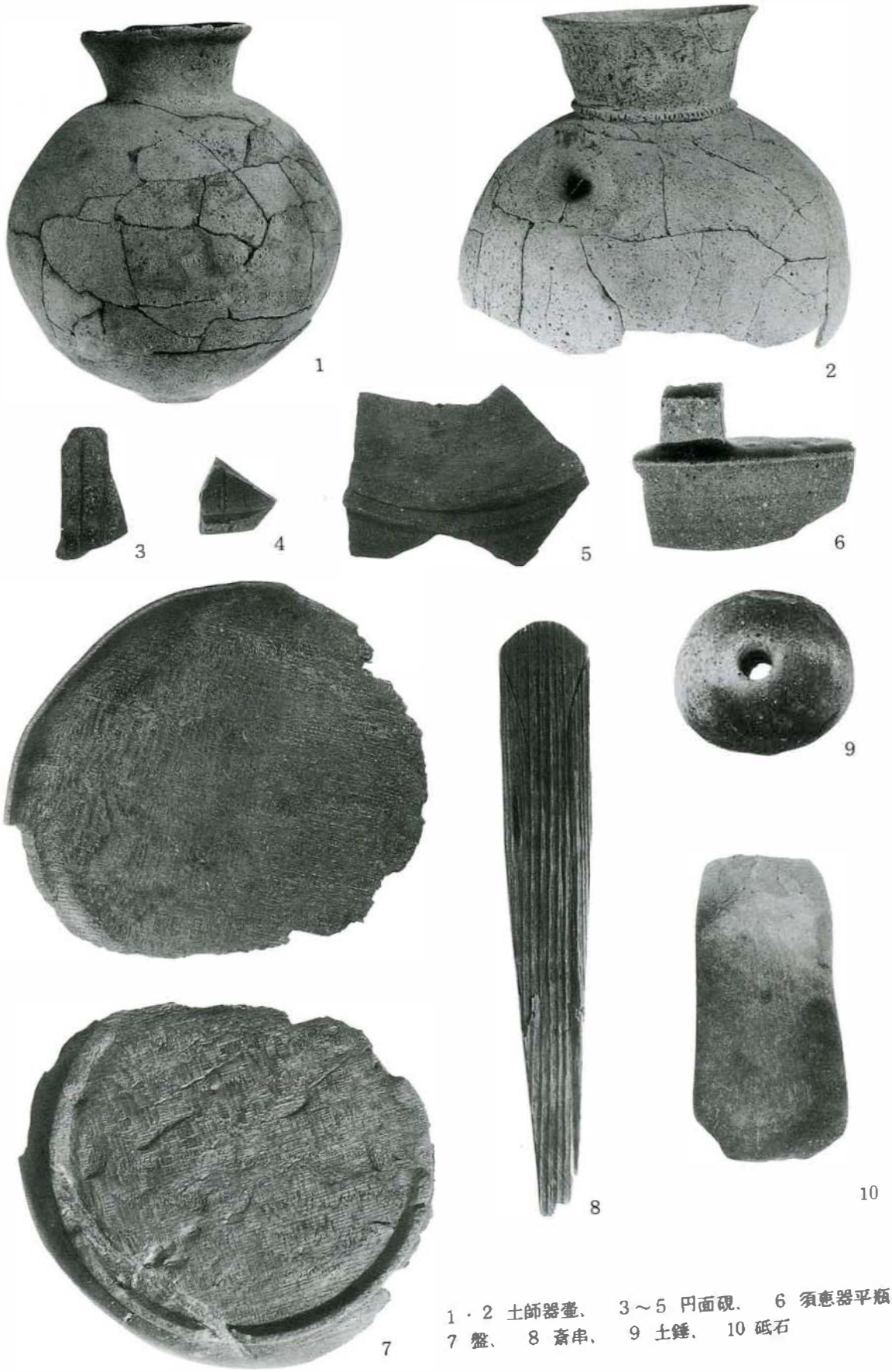


図版 1

SE－825 曲物出土状況

第Ⅶ層遺物出土状況

同　上



1・2 土師器壺、 3～5 円面硯、 6 須恵器平瓶
7 盤、 8 斎串、 9 土錘、 10 砥石

図版 3

1～6 墨書土器、 7 添付着土器、 8 灰釉陶器

Ⅳ　市川橋遺跡第15次調査

１．遺跡の立地と環境

本遺跡は多賀城市のほぼ中央に位置しており、市の中央部を南流する砂押川の東岸から東側の丘陵地にかけて、標高２～３ｍの微高地上に立地している。南北約1.6km、東西約1.4kmと広範囲を占める遺跡である。

本遺跡は縄文時代～奈良・平安時代にかけての大規模な複合遺跡である。周辺に立地する他遺跡との位置関係についてみると、本遺跡の北側には特別史跡多賀城跡があり東側には多賀城廃寺跡や高崎遺跡などが立地している。一方、西側の微高地上には山王遺跡や新田遺跡などの広大な遺跡が相接して立地している。特別史跡多賀城跡は奈良・平安時代の陸奥国府であり、多賀城廃寺跡はその付属寺院である。高崎遺跡、山王遺跡、新田遺跡はいずれも古墳時代～近世にかけての複合遺跡である。なお、本遺跡をはじめこれらの遺跡については便宜上遺跡名を区別しているが、奈良・平安時代に限ってみると国府多賀城を取り巻く一連の遺跡群として把握することができる。

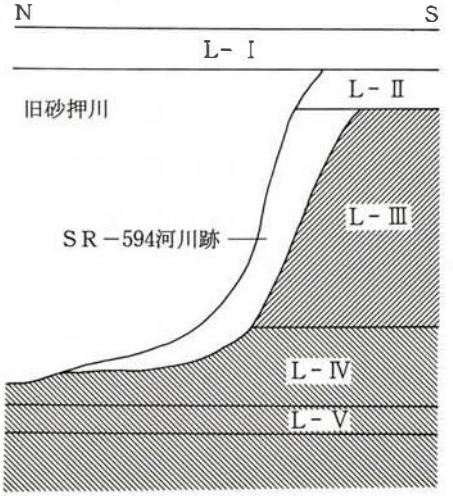
２．調査の方法と経緯

今回の調査は、東北電力の鉄塔移設に伴うものであり、第11次調査・第13次調査の南側、第14次調査の東側約620㎡を対象として実施した。調査は鉄塔設置区と鉄塔設置時に使用する足場設置区の２地点で同時に実施し、このうち鉄塔設置区の支柱部分と足場設置区の鉄柱部分が事前調査であり、その他は確認調査にとどめることとした。

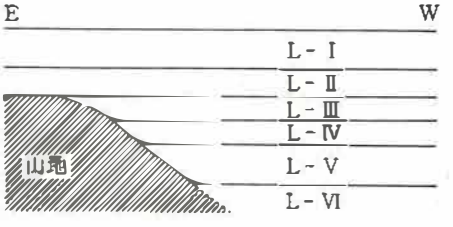
調査区の現状は水田となっており、西側から東側に緩やかに傾斜していた。３月30日、重機を導入し調査区の表土剥離を開始した。このとき足場設置区については、現在使用している水田の畦畔や用水路等を避け、Ａ～Ｇの７トレンチを設定した。表土剥離の結果、鉄塔設置区では現地表下約0.2ｍで、昭和26年からはじまった河川改修工事の際に埋められた旧砂押川の流路を確認した。一方、足場設置区では、Ｇトレンチの東側で地山を検出した以外はすべて褐灰色粘土層であり、遺構はまったく発見できなかった。このためＢ・Ｅ・Ｆトレンチ鉄柱部分を３箇所掘り下げたところ、どの箇所においても現地表の約１ｍ下まで褐灰色粘土が堆積し、さらにその下には黒褐色の亜泥炭層が厚く堆積しているという状況であったことから、Ａ～Ｆトレンチについては平面的な調査は不必要であると判断した。４月４日から作業員を投入し調査区の精査及び写真撮影を開始した。また、実測図作成のための方眼杭打測量及び４級水準点移動を行い、４月７日から平面図の作成を開始した。平面図は鉄塔設置区を20分の１、足場設置区を500分の１のスケールで作成した。４月８日、足場設置区の平面図作成が終了した。４月11日、鉄塔設置区の遺構検出段階での平面図作成が終了し、旧河川の堀込みを開始した。その際、支

柱部分に土砂の崩落を防ぐために矢板を打ち込み、ヘルメット着用での作業となった。掘り終えた順にセクション図を作成するとともに、旧河川下層の堆積状況を確認するため、さらに深く掘り下げた結果、現地表から約３ｍ下まで黒褐色の亜泥炭層が幾重にも堆積しているのを確認した。４月19日、深堀りした箇所を埋め戻し一切の調査を終了した。

３．基本層位



第１図　No.21鉄塔層序模式図



第２図　足場部分Ｇ区層序模式図

調査区の堆積土は鉄塔設置区で５層、足場設置区で６層に区分できる。

鉄塔設置区

第Ⅰ層　現水田床土である。厚さ約0.2mの暗緑灰粘土層で、下層に酸化鉄を多量に沈殿する。

第Ⅱ層　厚さ約0.2mの暗灰黄シルト層で、にぶい黄色シルトを横にスジ状に含む。

第Ⅲ層　浅黄色の地山層である。

第Ⅳ層　褐灰色砂と黒褐色粘土が相互に堆積する、厚さ約0.4mの層である。

第Ⅴ層　黒褐色と黒色の亜泥炭層である。

足場設置区

第Ⅰ層　現水田床土である。厚さ約0.2mの暗緑灰粘土層で、下層に酸化鉄を多量に沈殿する。

第Ⅱ層　褐灰色粘土層で、酸化鉄を多量に混入する。厚さは約0.14mである。

第Ⅲ層　褐灰色粘土層で、第Ⅱ層と比べ非常に粘性が強い。この層は、Ｇトレンチを除くすべてのトレンチで確認できる低湿地の堆積土である。

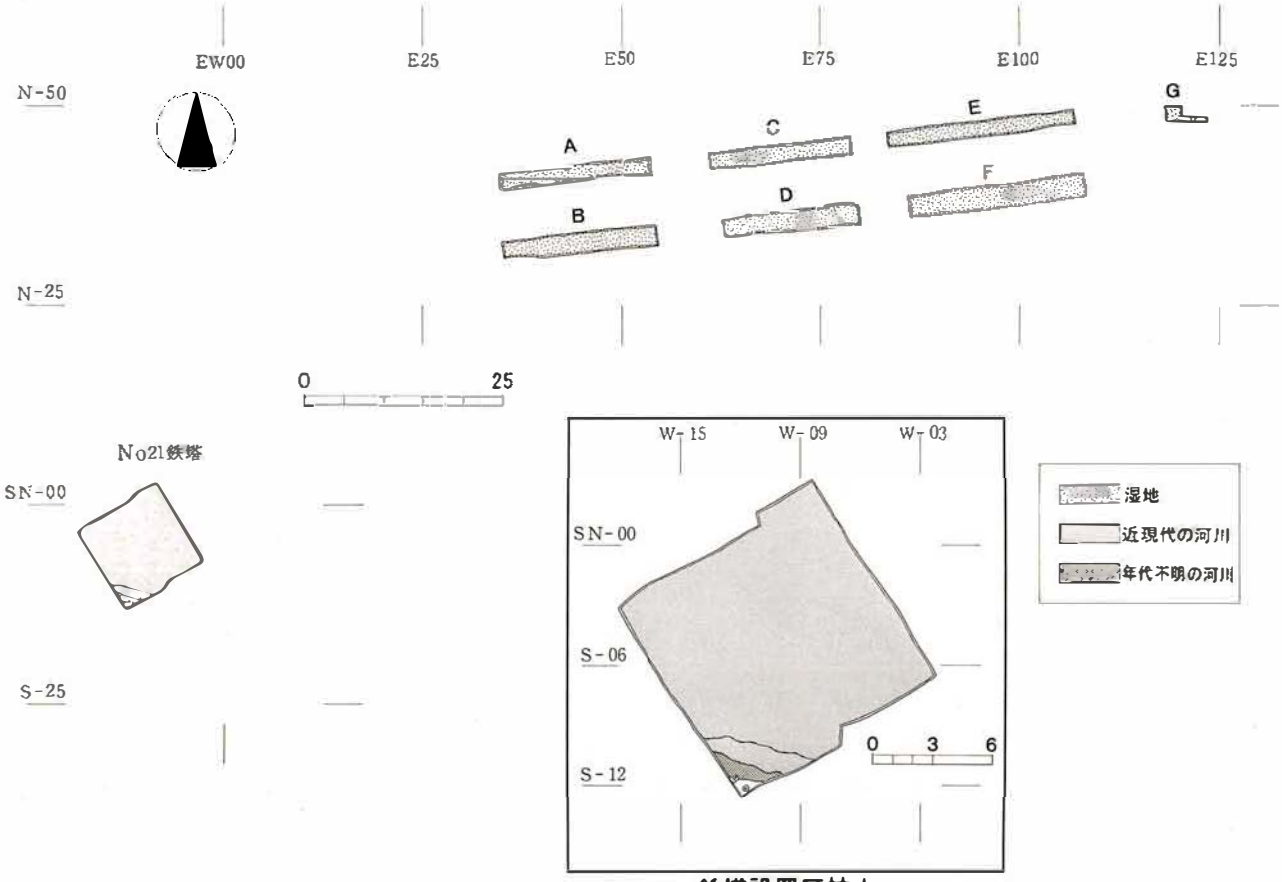
第Ⅳ層　緑灰色粘土層で、厚さは約0.12mである。第Ⅲ層同様、湿地の堆積土である。

第Ⅴ層　暗緑灰色砂と小ブロック状の緑灰色粘土を主体とする、厚さ約0.2mの層である。

第Ⅵ層　オリーブ黒色の亜泥炭層である。

４．発見遺構と遺物

(1)　鉄塔設置区では、昭和26年より始まる河川改修工事の際に埋め戻された旧砂押川流路を確認した。また、地山面でＳＲ－１河川跡と小柱穴３個を発見した。



鉄塔設置区拡大

第３図　調査区位置図

○ＳＲ－594河川跡

第Ⅱ層除去後、浅黄色の地山面で検出した東西方向の河川跡である。旧砂押川によって大部分が壊されているため、川幅は不明である。埋土は暗灰黄シルトを主体とし、下層に緑灰色砂層が堆積している。遺物は須恵器の細片が数点出土しているのみである。年代は不明である。

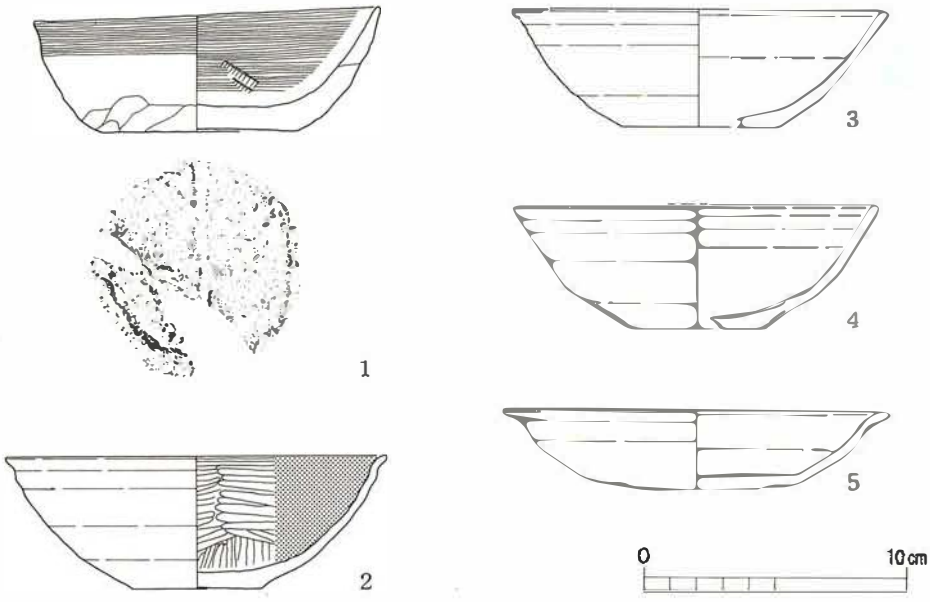
(2) 足場設置区では、Ａ～Ｆトレンチ各層から遺構・遺物の発見はなく、すべて湿地の堆積土および亜泥炭層であった。しかしＧトレンチの東側で現表土から約30cmほどで浅黄色の地山が表れ、本調査区に広がる低湿地帯から東側の微高地に移行するラインを発見した。

○Ｇトレンチ発見遺構

東側の地山面で一辺約0.7ｍの方形の遺構を発見したが、調査区の範囲が限られていたため北側の一部を検出したのみで、性格・年代については不明である。

○Ｇトレンチ発見遺物

出土遺物は、地山から低湿地への落ち際から須恵器片100点、土師器片193点（うちロクロ未



（単位：cm）

番号	種別	器種	出土地区層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	土師器	坏	足場Gトレンチ[illegible]層	口縁部：横ナデ，体部：粘土紐巻上げ痕 体部下半：ヘラケズリ，底部：木葉痕	口縁～体部：ヨコナデ 体部下半：ヘラナデ→横ナデ	7割	13.2	7.5	4.7~4.15	ロクロ未使用，底部木葉痕	R－1	4
2	土師器	坏	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	4割	(14.6)	5.0	(5.0)		R－8	5
3	赤焼き土器	坏	〃	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	6割	14.3	6.0	4.5		R－2	5
4	赤焼き土器	坏	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	ロクロナデ	6割	13.8	5.0	4.7		R－3	6
5	赤焼き土器		〃	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	3割	(14.8)	4.8	3.0		R－4	7

第４図　足場設置区Ｇトレンチ第Ⅲ層出土遺物

74点、ロクロ使用119点)、赤焼き土器34点、その他緑釉陶器片、刻印瓦、平瓦、丸瓦等が出土した。そのうち実測図にできたものは、土師器坏２点、赤焼き土器坏３点である。

５．まとめ

(1)　鉄塔設置区で、近・現代の砂押川流路を確認した。また地山面で近・現代の砂押川よりも古い河川跡を発見したが、年代は不明である。

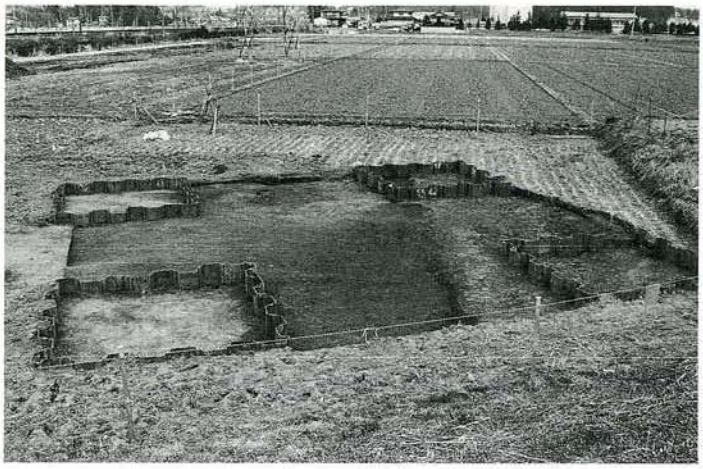
(2)　足場設置区はＧトレンチ以外はすべて低湿地であり、遺構・遺物は発見できなかった。

(3)　Ｇトレンチでは、本調査区に広がる低湿地帯から東側の微高地に移行するラインを一部検出した。

(4)　今回の調査では、本調査区の９割以上が低湿地および河川であったことが判明した。

引用参考文献：多賀城市埋蔵文化財調査センター（１９９４）「市川橋遺跡ほか」

①

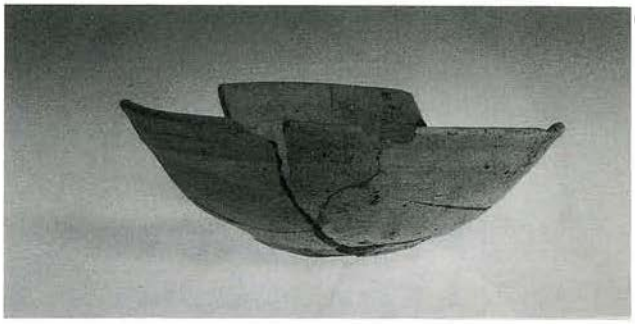


②

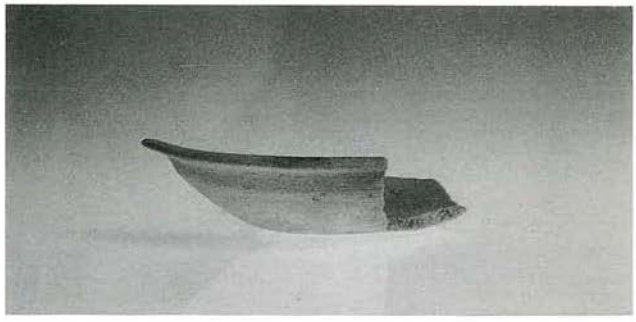
③

④

⑤



⑥



⑦

⑧

① No 21 鉄塔　全　景（旧砂押川流路）　西側より撮影
② 足場設置区　全　景　西側より撮影
③ 足場設置区　Gトレンチ　湿地の落ち部分　西側より撮影
④ 土師器坏　Gトレンチ第3層　第4図　1
⑤ 赤焼き土器坏　〃　〃　4
⑥　〃　〃　〃　〃　5
⑦ 刻印互　『占』　〃　〃
● 緑釉陶器　〃

図 版　調査区全景と出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	サンノウイセキ　イチカワバシイセキ
書　　名	山王遺跡・市川橋遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第38集
編集者名	鈴木孝行　武田健市
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
発行年月日	西暦　1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
サンノウイセキ 山王遺跡	タガジョウシサンノ、ウナングウ、イチカワ 多賀城市山王、南宮、市川	18	18013	38°17′25″	140°59′15″	19940401 19940513	150m²	鉄塔建設
イチカワバシイセキ 市川橋遺跡	タガジョウシイチカワ、ウキシマ、タカサキ 多賀城市市川、浮島、高崎	18	18008	38°17′42″	140°59′24″	19940401 19940419	372m²	鉄塔建設

所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡	集落	古墳時代 平安時代	水田跡 掘立柱建物跡 溝跡 土坑 井戸跡	土師器 土師器・須恵器・灰釉陶器 斎串・刀子	
市川橋遺跡	集落		河川跡	土師器・須恵器 赤焼き土器・瓦 緑釉陶器	

多賀城市文化財調査報告書第38集

山王遺跡・市川橋遺跡

平成７年３月31日

編　集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
発　行　多賀城市中央二丁目27番１号
　　電　話　(022) 368－０１３４
印　刷　富士印刷有限会社
　　多賀城市笠神五丁目15番28号
　　電　話　(022) 367－０１５７